

# 「みなす」差別と向き合い、看破する児童・生徒の育成を目指す授業開発 —小学校歴史単元「江戸の社会の変化と人々」における「役者村」の成立と発展を事例に—

和田 幸司\* 山内 敏男\*\*

## 要旨

本稿は、17世紀後半から18・19世紀にかけて、「役者村」と呼ばれる芸能者集団の成立と発展、その歴史的意義についての授業開発の有用性を明らかにする。17世紀に三都を中心に発展した歌舞伎は、地方にも大きな影響を及ぼす。そのひとつである「播州歌舞伎」の原点「高室芝居」は、18～19世紀にかけて、万歳としての公演形態をとりながらも歌舞伎上演を各地で行い、東高室村は西日本で著名な「役者村」として成長した。

この「高室芝居」の成立と発展を教材として取り上げる意義として、(1)現代社会における芸能と歴史的に見た芸能との間では差別や偏見に関わるギャップが存在し、その不当性を見出しやすいという点、(2)芸能を身近な存在として位置づけられることで、現代社会に通じる学びの意味を見出しやすいという点、(3)「高室芝居」を取り上げるとは、18世紀以降の差別や偏見の具体を捉え得るという点、の3点を明らかにした。さらに、人権教育の単元構想として、第1段階では芸能に対する現在と過去における状況の異同を把握し、学習対象となる「高室芝居」にかかわる内容理解を行う有効性、第2段階では差別にかかわる背景や影響の理解を深めていくことの有効性、第3段階では属性への差別にかかわって現代社会に継承されていること・断絶していることは何かを問い、継続と変化を検討することの有効性を指摘した。

キーワード：人権学習、歴史学習、近世身分、役者村、歌舞伎

## 1. はじめに

筆者らは、前稿にて、令和2年度版小学校社会科教科書、および、教師用指導書（教育出版・東京書籍・日本文教出版）における近世身分に関する記述、その授業展開の分析・検討を行い、(1)「支配－被支配」の関係理解に限定されやすいという点、(2)近世身分の成立と差別の強化の一元的理解の改善が必要である点を明らかにした<sup>(1)</sup>。

克服すべき課題として、歴史学研究の視角からは、近世の役割担が「支配－被支配」の関係に限定されることなく、広く近世国家の身分成立要件として捉えられるべき点、身分成立と差別強化を一元的に捉えるのではなく、18世紀の転換期における社会的背景をもとに差別を把握する点の重要性を指摘した。社会科教育学研究の視角からは、現状カリキュラムにおいては、17世紀後半から18世紀にかけての社会的な身分制の再編と強化を取り上げることが困難である点、支配の仕組みを学ぶことに力点が置かれていることで、時期や年代における異同や推移が等閑視され、諸身分が切り離された状態で支配されていたことが学習される懸念、目標と問いが不一致の関係であり、教師が役割担や社会集団について取り上げることが容易でない点を析出した。総じて授業設計及び実践上の課題として想定できるのは次の2点である。一つが江戸時代共通であるという過度な一般化を回避する点、二つが時期や年代における異同、推移を等閑視せず、身分制の構造、身分相互の関係が近世全般にわたって同質であるといった不十分な認識が形成されないよう留意する必要がある点である。

上記の課題をふまえて、本稿では17世紀後半から18・19世紀にかけて、「役者村<sup>(2)</sup>」と呼ばれる芸能者集団の成立と発展、その歴史的意義を扱った授業開発に取り組む。「役者村」の授業開発は18世紀以降の差別や偏見の具体を捉え得るという点でその効果が期待できるばかりか、過度な一般化を回避し、「継続と変化」の把握によって、差別や偏見を克服するための社会との向き合い方を議論

し、子どもたちが開かれた判断を手に入れることができると考えられる。

## 2. 「高室芝居」の成立と発展

17世紀初頭に誕生した歌舞伎は、幕府の禁制にもかかわらず本格的演劇として発展する。三都を中心に元禄歌舞伎として完成する一方、地方巡業に活路を見出した役者たちによって、地方の歌舞伎も発展していく。

村では神社境内の中に「農村舞台」が作られた。全国では1400ほど現存しており、兵庫県下では140ほど見つまっている。佐用郡は3ヶ所しか現存していないが、69ヶ所が江戸期にあったという<sup>(3)</sup>。特に佐用郡南光町上三河の舞台は「二階まわり」という回転装置があり著名である。播磨地域では「播州歌舞伎」として近世から近代へと発展し、1982年に県立播磨農業高校に「播州歌舞伎クラブ（現在は「郷土伝統文化継承クラブ」に変更）」が創設された。また、西脇市では「多可町播州歌舞伎クラブ」が活動を行い、佐用郡では「南光子ども歌舞伎」として活動を行なっている。

この「播州歌舞伎」の原点が、近世播磨国において「役者村」と呼ばれた加西郡東高室村の「高室芝居<sup>(4)</sup>」である。本節では、「高室芝居」の歴史を先行研究に依拠しながら、教材化への視点や内容を敷衍していく。

### (1) 「高室芝居」の成立

役者村の多くは中世からの芸能民の系譜をひくとの由緒を伝えることが多いが、「高室芝居」も例外ではない。東高室村は近世において陰陽師として土御門家の支配を受けている。延享元年(1744)、「高崎播磨」という陰陽師が東高室村に存在し、陰陽師触頭として播州以西33ヶ国の易道師として許可を得ていたと伝える。『加西郡誌』に以下の史料がある<sup>(5)</sup>。

\* 姫路大学 教育学部 教授

\*\* 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授

御領知名勝旧跡図絵下書抜

東高室万歳芸

御武運長久国土農稔五穀豊熟諸病平愉ノ祈祷ト唱万歳芸元禄年中ニ始而是ヲ行ヒ候節、但馬生野御代官ヨリ銀山為繁栄被召寄旧例ニ依リ今ニ毎年正月元日出勤イタシ候、其頃免許無之候而ハ他国出難成候付、土御門家之御免許ヲ請ヒ播州一國陰陽道触頭高崎播磨ト名字頂戴、夫ヨリ播磨座ト唱追々相増七組ト相成今七座ト申習ヒ狂言振ノ所作ヲイタシ諸国浦々迄モ頼ニ任セ廻リ申シ候

土御門殿御免許写

播磨陰陽道触頭役之事

加西郡東高室村

高崎播磨

右之者 任 故播磨例具表触頭被仰付候御掟之趣無懈怠可勤仕者也仍令

土御門殿

延享甲子年六月十五日家司奉之

許 状

一、呼名可謂播磨事

一、可着烏帽子事

一、可懸木綿纏事

土御門殿

延享甲子年六月十五日 家司奉之

播州加西郡東高室村

高崎播磨殿江

本史料から、延享元年(1744)以降、元禄期より行われ始めた「万歳芸」が土御門家の権威によって、広範な諸国巡業が可能になったことが理解できる。永井彰子氏は地役者の検討を行うなかで、「高室役者」を検討し「正月に万歳に出かけたり、芝居の幕開きに『お面掛け』と称し、三番叟で寿福したことは、彼らの出自が雑芸者であったことを物語っている<sup>(6)</sup>」と述べており、東高室村が中世からの芸能民の系譜をひくとの推察を行っているが、特に異論はない<sup>(7)</sup>。

この芸能者集団の身分であるが、もっとも説明が待たれるところである。しかし、地域による多様性がある点や、社会的身分と制度的身分のどの視角から検討するかでも異なってくるため、教材化に当たっては留意する必要がある。ただし、近年の研究で、福岡藩において、いわゆる「解放令」の対象が「穢多」「非人」「寺中(芸能者集団)」であったこと、天保5年(1834)に「寺中」を皮多同様に扱うように指示した史料が公開されたことから、芸能者集団であった「寺中」が「穢多」身分に近い位置であったことが明らかにされている<sup>(8)</sup>。

なお、柳田國男が「毛坊主考」で指摘したように、東高室村は志久(夙)と呼ばれていたという<sup>(9)</sup>。夙とは近世においては「平人」と「穢多」の中間に位置する身分とされ、交際は禁じられなかったが結婚については「穢多」身分同様の差別を受け、現在においても完全に払拭されてはいない。また、東高室村は俗謡の歌詞中で「東

高室下がりでなけりゃ、ついでに行きたい三代吉に」と伝えられる。東高室の人気役者「三代吉」を指すと考えられるが<sup>(10)</sup>、ここには東高室への卑賤視が理解できる。芸能者集団の職分への社会的差別があったことに相違ない。以上、東高室村における「高室役者」の中世からの系譜について考察した

さて、「高室芝居」の初見史料は『播磨鑑』の記事である。『播磨鑑』の成立年は明らかではないが、宝暦12年(1762)、享保期(1716-1736)・元禄期(1688-1704)とも言われている。以下の史料である<sup>(11)</sup>。

一、加西郡 高室村鵜野村栗野新村 此所ニ歌舞伎役者有テ諸国へ出ル

史料から、高室村・鵜野村・栗野新村に役者が存在し、一座を組んで諸国に巡業に出ていることがわかる。『加西郡誌』によると、「元禄の初め頃に、大阪から一人の俳優が本郡の東高室村に流れて来て、村の若者によく芝居の話をして聞かした。そして話に身が入って来ると、せりふや身振りまでして見せた<sup>(12)</sup>」とあり、元禄年間(1688-1704)に起源を求めている。伝説に違いないが、播磨国において歌舞伎上演の初見は寛文8年(1668)の龍野であり、以降、延宝2年(1674)飾西田村、延宝6年(1678)室津、延宝7年(1679)姫路などの記録が残っている<sup>(13)</sup>。歌舞伎が非常に人気があったことが理解でき、東高室における地芝居成立が上記の伝説であったとしても何らの不思議はない。いずれにしても『播磨鑑』の成立時には諸国に巡業に出ていることから、その成立は前述した年代を遡ることになるので、元禄期も視野にいれることができる。近世中期の俗謡に「石屋三分に百姓が一分、残る六分は皆俳優」とあることから<sup>(14)</sup>、近世から近代にかけて、村人の多くが役者であったと捉えることができる。

## (2)「高室芝居」の発展

本項では『加西市史』ならびに名生昭雄氏の論考に学びながら、「高室芝居」発展の教材化の視点を整理しておく<sup>(15)</sup>。

「高室芝居」の発展を示す史料として、以下の文政8年(1825)の見立番付「諸国芝居繁栄数望<sup>(16)</sup>」があげられる。

東方	西方
大関 江戸境町 中村座	大関 大坂中の芝居
関脇 江戸ふきや町 市村座	関脇 同 角の芝居
小結 江戸木挽町 森田座	小結 京四条南側芝居
(中略)	
行事 新興舞 播磨高村座	近江十日芝居

「播磨高村」は「播磨高室」と考えられ、江戸・大坂の大芝居の格付けのなかに、行事として、「新興舞」の肩書きと共に明記されている。「新興」の文言から、18世紀後半から19世紀での発展が推察できる。『播磨鑑』の記事を宝暦12年(1762)に設定するならば、60年余りの年月で、「高室芝居」は日本各地に興行に出かけ、多くの地域でその名前が知られるようになったと言えるであろう。

さて、教材化に際しては地域史料が必須となる。村内で最も古い史料は大歳神社の享和2年(1802)の手水石銘である。以下に、

その写真と翻刻をあげておく。

# 史料 1 東高室村大歳神社手水石銘

宗次郎, 三代吉, 新蔵,  
嘉兵衛, 勇蔵, 民吉,  
太治郎, 巳之吉, 要蔵,  
おくま, およね



ここに記されている「三代吉」は、前述した「東高室下がり」でなけりや、ついて行きたい三代吉に」とうたわれた人気役者「三代吉」と推察でき、「新蔵」は後の嵐新蔵座の新蔵と考えられる。

こうした役者名は、文化3年(1806)の銘のある村内曹洞宗西福寺の追薦塔にも記されている。以下に、その写真と翻刻を示す。

# 史料 2 西福寺追薦塔石銘

大和谷座中文化三寅七月十七  
日造立 諦屋浄聴信士

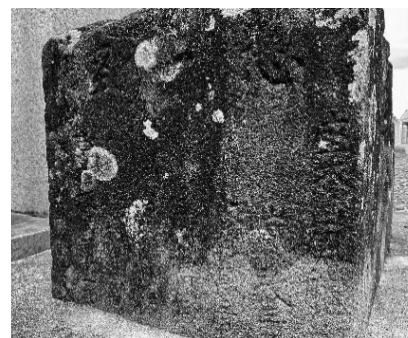
藤川栄次郎 嵐辰蔵 大谷市蔵  
木村八百蔵 大和川此八(後略)



さらに、文政年間になると、他村の役者が「高室芝居」に参加していることが分かっている。以下に、文政11年(1828)大歳神社狛犬に記された記事を写真と翻刻を示す。

# 史料 3 東高室村大歳神社狛犬石銘

奉 献	文政十一年戊子十二月吉日
座 本	嵐 勝蔵
	嵐紋三郎
	谷村甚三郎
	三杵常蔵
	百村綱祐
	澤村光三良
東 村	坂東富三良
大 坂	嵐 亀蔵
市場村	飴屋弥吉
	嵐 歌助
	中村□蔵
	谷村善兵衛
	浅尾久左エ門
兵 庫	花桐八重蔵
同	片岡 能治
同	中村 哥時
□ 道	錫木久米二



この狛犬石銘から、座元が嵐勝蔵であり、東高室で10名・他村7名、計17名の構成で一座を組んでいることが理解できよう。このように、文政期には「高室芝居」は兵庫・大坂の役者を含みこみ、発展著しい役者集団に成長していくのである。

# (3) 天保の改革と「高室芝居」

天保の改革が綱紀肅正に取り組み、特に歌舞伎に厳しい弾圧を行ったのは周知のところである。生野町役場文書(現朝来市)に以下に史料が残存している<sup>(17)</sup>。

国々城下社地等におゐて江戸京大坂方旅稼ニ出候歌舞伎役者共を抱芝居狂言等相催候由、右者其処之風俗をみだし不可然筋ニ付、向後決而抱入間敷候。尤三都狂言座之外他国稼不相成旨、今般取締方急度申渡候間、得其意此上右之もの共罷越芝居興行等ニ及対談候ハ、其所ニ留置最寄奉行所又者御代官領主役場等江早々申出候 (後略)

本史料から、天保の改革における風俗取締りの厳しさが理解できる。役者の旅興行を禁止し、三都の市中から歌舞伎を隔離した政策が垣間見える。おそらく、こうした文書は東高室にも届いていると推察でき、「高室芝居」の巡業が非常に困難になったと考えられる。このような状況下、東高室村は次のような嘆願書を公儀に提出した<sup>(18)</sup>。

乍恐以書付御歎奉申上候

田安殿御領知

播州加西郡

東高室村

一、於当村御高三百七拾石斗り、家別百六拾軒余・人別七百八人余、右田畑不相応多人数住居致候ニ付、右七百八之内百四拾人余、去ル享保年中ニ村方才蔵と申者より、京都土御門御殿奉申上候而、播磨一國陰陽道触頭と成り、呼名高崎播磨と改り、辻占并ニ天長地久之御祈祷万歳芸奉蒙御免許、依之三人五人組合、自他農事之隙ニ順在仕来り候処、昨寅年格別之質素御儉約被為仰出、三都之外芝居狂言、門芝居迄御禁止被為仰付置、奉畏候。我等芸事も一円ニ棄却仕罷有候処、分ケ御歎御断奉申上度義ハ、前文奉申上候当村在来之万歳芸ハ、元来、芝居狂言之態ニ而ハ無之候処、近年衣服容体時風ニ応じ、不覚芝居狂言ニ似寄候場も有之

候而、御趣意ニ相違候事も難斗奉存候。此儀ハ重々奉恐入候。

(中略)

	右村
	万歳芸之者共惣代
天保十四年	右之趣相違無御座候ニ付
卯三月	乍恐奥印仕候
	右同村庄屋
	徳左衛門 ㊤

本史料記事では370石の村高に対して「不相応之多人数住居致候」として、京都土御門家より「播磨国陰陽道触頭」が許可された状況を説明している。農業の副業として万歳芸を行っていること、そして、万歳芸が「元来芝居狂言之態ニ而ハ無之候」として申し開きをしている。

『加西市史』によると<sup>(19)</sup>、この嘆願書の時期以降、「高室芝居」の座元の肩書に「高崎播磨」の文字が目立ち始め、万歳としての公演形態をとって歌舞伎を上演していたとしている。そして、弘化2年(1845)と4年(1847)には岡山吉備津神社の番付に記載され、嘉永3年(1850)と4年(1851)には讃岐金毘羅芝居に出演、嘉永7年(1854)には厳島神社宮島大芝居に登場する。このように、「高室芝居」は東高室村に7座を有するまでに成長したのである。

以上、先行研究に学びながら、教材化に向けて、「高室芝居」の成立と発展にかかわる史料を提示しながら整理を行った。全国的な歌舞伎の広がり象徴する存在として位置づけが可能であり、地方への歌舞伎の発展を知る指標として、18世紀の転換期以降において属性が身分差別に転化する指標として、「高室芝居」の歴史的意義が存する点を明らかにした。

### 3. 授業の内容選択原理と教材の有効性

筆者らの研究グループが取り組んできた「近世身分制研究を生かした歴史学習プログラムの開発」における成果と課題として次の点が析出されている<sup>(20)</sup>。第1節「はじめに」で概略を指摘しているが、さらに詳しく論じていきたい。

成果としては、第一が武士・町人・百姓・差別されていた人々それぞれの集団を具体的に検討していくための手立てとして「身分」「住む場所」「仕事」に分類させ、表にまとめたものを子どもたちに提示し、その違いを捉えさせることが近世身分制の構造理解につながる。第二が〈社会集団〉〈職分〉〈役〉の具体を模式的に示すことが不当性への疑問をより明確に生じさせること、第三が〈職分〉が多様であることを資料から類推させることにより、近世社会が社会的分業により成り立つ社会であることの理解を促進すること、第四が社会的分業に着目させ、担っている仕事に対して平等に扱われていないことを取り上げることによって、授業者による価値づけを強制しない配慮ができること、つまり社会や文化を支える存在なのに、不当な扱いを受けるのはよくないことが子ども自身によって気付きを得られること、の4点が期待できる。

一方、課題としては、〈職分〉を取り上げた際、手工業が社会を支えていることをおさえておくこと、(差別を受けていた人々が)置かれていた状況や立場の意味を理解する学習過程を確保すること

が重要であることが示された。

現在使用されている教科書の分析結果からは、教科書掲載の事例をそのまま取り上げて実践した場合の課題として、次の3点が指摘できる<sup>(21)</sup>。第一に身分制度が江戸時代を通して同質のこととして扱われる可能性、および、江戸時代全体が同じ構造であると見なし一般化が図られていること、第二に支配の仕組みを学ぶことに力点が置かれ、「いかに支配したか」という支配者側からの視点での捉えが強調されていること、第三に支配者側からのアプローチにより学びが構想・実践させることで、百姓・町人・差別された人々それぞれが切り離された状態で支配されていたことが暗示的に示され、結果として誤った理解につながりかねないことである。

以上の研究結果から、本研究において授業の内容選択に際して、第一に時代の文脈を踏まえた認識を獲得すること、第二に子どもたち自身が自己言及することが重要であると考えた。第一の点では、取り上げた事例の時代の文脈として、江戸時代であれば、近世身分制の構造、社会的分業により成り立つ社会であったこと、18世紀以降社会の動揺とともに身分による差別が再編・強化されたことをふまえた理解や価値判断を行うことを求めたい。さらに、社会の構造として身分制度の「継続と変化」を捉え、差別や偏見がいかに根拠に乏しく不当であるか、価値観が脱構築できることを求めたい。第二の点では、歴史的現象が現代生活における人権問題に適用できるかどうかの吟味、特に社会や文化を支える存在なのに、不当な扱いを受けている事象に出会った上で「類似点が自己や自己にかかわる社会にも当てはまっていくのではないか」ということに気付く学習活動、すなわち、現代社会における差別事象に向き合う資質能力を育成することを目指し、自己の見解として自己言及させることを授業過程に組み入れることを求めたい。

内容選択の原理としては、歴史から差別や偏見を克服するための社会との向き合い方を学ぶ際には、子どもたち自身によって思考・判断が行われ、歴史を学ぶ意味を自ら獲得していく学習を組織することが重要となる。そこで、歴史学習における思考・判断の目標モデルとして、セイシャスらが示したHTPの歴史的思考概念を参考にした<sup>(22)</sup>。提示された6つの歴史的思考概念のうち、差別や偏見を克服することを念頭に置けば、異なる文脈における異同を考察する「継続と変化」、現代社会に生きる私たちが差別の不当性を見抜き、よりよい社会を実現していく手掛かりとしての倫理的側面に着目した。前者を通して、現代社会にも通じる問題であるかどうかについて、子どもたちに問いかけ、その内容を考えさせることで、身分成立の要件と身分差別が強化される推移と構造、社会的背景に迫っていくことができると考える。後者では、歴史的現象を通して同じ社会の一員なのになぜ差別を受けるかという観点(属性が身分差別に変化するという点)から、子どもたちが思考し、現代社会への言及性を高めていく学習が可能となる。

上記の内容選択原理、学習の必要性をふまえるならば、「高室芝居」の成立と発展の様子を教材として取り上げる意義は次の3点となる。

第一は、現代社会における芸能と歴史的に見た芸能との間では差別や偏見に関わるギャップが存在し、その不当性を見出しやすいという点である。現代社会における芸能は、メディアを媒介として子どもたちが想起しやすい身近な素材であり、憧れや娯楽を提供し

てくれる存在としてポジティブなイメージであることが想定できる。一方、前章で指摘したように、歴史的には卑賤視される社会集団として位置づけられており、教材化にあたっては、地域による多様性がある点や社会的身分と制度的身分のどの視角から検討するかなど留意する必要がある。

なお、前述したように、近年の研究では福岡藩において、いわゆる「解放令」の対象が「穢多」「非人」「寺中（芸能者集団）」であったこと、天保5年（1834）に寺中を皮多同様に取り扱うように指示した史料が公開されたことから、「穢多」身分に近い位置に存在していたことが明らかにされている<sup>(23)</sup>。したがって、被差別身分への差別とその不当性を明らかにできる教材として位置づけることができよう。さらには、現代社会に置き換える問い直しを行うことで、見た目や派手さに対して奇異の目で見ることがあるかどうか、異なる時代の文脈における異同を考察し、「継続と変化」の視点から差別や偏見を捉え、自己と社会を問い直し、判断内容の相対化を図る手掛かりともなり得よう。

第二は、第一の点とも関連して芸能を身近な存在として位置づけることで、現代社会に通じる学びの意味を見出しやすいという点である。子どもたちにとって芸能は既知のものとして存在し、芸能に対する価値観を既に形成していることが想定でき、既存の価値観とは対立する価値観の提示がなされることにより、価値観の脱構築を伴う自己言及ができる点である。例えば、前述したように芸能を憧れとして価値づけていた場合、差別や偏見の対象であったことを知ることで価値観をゆさぶられ、子どもたちが不当性について言及しやすい状況が形成されることになる。差別や偏見への疑義が子どもたち自身により見出されることは差別や偏見に関わる学びの意味を見出すことになり、改めて差別や偏見に向き合う自己と社会に関わる価値観を脱構築することにもつながる。

第三は、「高室芝居」を取り上げることで、18世紀以降の差別や偏見の具体を捉え得るという点である。本論で取り上げるのは播磨国における一芸能（歌舞伎）であるだけでなく、江戸・大坂の大芝居の格付けに混じって、行事として「新興舞」の肩書きと共に高室芝居が明記されていることから<sup>(24)</sup>、全国的な歌舞伎の広がり象徴する存在として位置づけられる。したがって歌舞伎の広がりとともに何か起きていたかを知る指標としても教材化する意義は大きい。

一方で教材化・実践化にかかわる課題として次の2点があげられよう。第一は、近世社会における自治と支配の構造をいかに学習内容として位置づけるか、第二が近世身分制の推移（時間的経過からみた構造の異同）をいかに授業に組み入れていくかである。

第一の点については、筆者らが先に提案し実践化した「〈社会集団〉〈職分〉〈役〉の概念、諸身分全体の社会への位置づけを理解する学習プログラム<sup>(25)</sup>」の授業を先行して実践することで、社会的身分論の研究史を踏まえない硬直した身分理解の過度な一般化を回避し、身分制の構造や身分相互の関係が近世全般にわたって同質ではないことを踏まえた上での認識、そして、認識に基づく価値観形成が可能となる。第二の点については、第一の点と同様、身分制についての理解を促進させる授業を先行させ、その上で18世紀以降の事例を取り上げ、「継続と変化」の実際が学習できる授業をカリキュラムに組み入れることで、18世紀以降の差別や偏見の具体を

捉えることができよう。いずれにしても、属性の観点から「差別」を扱う時代の社会構造（社会の仕組み）の「継続と変化」を学習に組み入れ、社会構造自体の問題として捉えることができる授業実践が可能になるといえる。

#### 4. 「高室芝居」を教材化した人権教育の単元構成

第3節で述べた「播州高室芝居」を取り上げる意義をふまえ、判断内容の相対化が図れ、自己、社会に関わる解決すべき課題である事としての吟味、自己言及性を促す学習過程として次の3段階を想定している。

○第1段階 状況の把握、「差別」の発見

○第2段階 属性への「差別」にかかわる背景、条件、意図の理解

○第3段階 「継続と変化」の把握、歴史的意義の説明

第1段階では、芸能に対する現在と過去における状況の異同を把握し、学習対象となる高室芝居にかかわる内容理解を行う。はじめに、芸能に関するイメージを語り合うことで、現代における笑いや感動を提供してくれる人たち、あるいはきらびやかで魅力的な存在としてのタレント、俳優など既存の状況を確認していく。次の展開では、いわゆる芸能人は歴史的にどのような移り変わりを経てきたかを教科書から概観する。使用する教科書として日本文教出版『小学社会6年』を想定した場合、田楽の想像図（97頁）、田楽、能、狂言の様子（114～115頁）、田楽の様子（118頁）を取り上げることができる。芸能が成立、発展してきた状況を把握し、人々を励まし楽しませる役割を担っていた点（114頁）をおさえ、時代の文脈に即した芸能の位置づけを図る。

次に、「播州高室芝居」にかかわる状況の把握を行う。資料として「江戸で演じられた歌舞伎の様子<sup>(26)</sup>」、「播州歌舞伎の様子<sup>(27)</sup>」、「諸国芝居繁栄数望<sup>(28)</sup>」、「土御門家裁許状<sup>(29)</sup>」を提示し、くらしの中の楽しみのひとつであったことを理解していく。この段階の最終である「差別」を発見する具体としては、福岡藩において、いわゆる「解放令」の対象が「穢多」「非人」「寺中（芸能者集団）」であったこと、東高室村が俗謡に歌われる歌詞（柳田國男「毛坊主考」での指摘）を提示し、解釈していく。この段階では、人々を楽しませる役割を果たしている芸能に携わる人たちが差別されていた現実子どもたちを向き合わせ、なぜ、差別の対象とされているのか、役割と差別との間で矛盾している点に気づかせ、問いを生成する過程として位置づける。

第2段階では、まず「差別」にかかわる背景や影響の理解を深めていく。発見した「差別」が現代社会への問題提起となるかどうかを問い、「なぜ、平等であるはずの人間が差別的な扱いを受けるのか」という学ぶ意味を生起させることをねらう。具体的には、18世紀以降の差別について取り上げ、①17世紀後半より百姓身分と町人身分が安定的に再生産されるようになり、「穢多」身分への差別や規制が一層強まってくる点、②18世紀の地域社会の内部で生み出された差別が、徐々に全国的に把握されるようになる点の双方もしくはいずれかを取り上げ、接続させる必要がある。単に個人が差別を受けていることへの気付きにとどまらず、身分ごとの集団

としての属性により生活が営まれ同時に支配を受けていたことを理解すると同時に、属性が身分差別に転化していったことによる不当性への気づき、すなわち学ぶ意味の獲得を目指したい。

第3段階では、属性への「差別」にかかわって現代社会に継承されていること・断絶していることは何かを問い、「継続と変化」を検討することで、継続していれば、わたしたちの生活に影響を与えている部分は何か、断絶しているならば、現代社会でも起き得る

「差別」ではなくなったのは何かを問う。本論であれば「人を楽しませる仕事をしている人たちがなぜ差別を受けなければならないのか」を中心発問とし、属性への「差別」の不当性ととも、「集団を『みなす』ことが私たちにもあるのか」を問い、差別や偏見を克服するための社会との向き合い方を議論し、開かれた判断、つまり子どもたちがなぜ「差別」と考えるのかそれぞれの言葉で説明することを目論む。

## 5. 歴史的事象の具体を通した単元の実践

### (1) 単元名

「江戸の社会の変化と人々」(4時間)

### (2) 単元目標

目標の設定に際して、第1段階から第3段階の各学習過程において獲得できる能力と知識について、目標を設定した。

#### 【第1段階】

- ・芸能に対する現在と過去における状況の共通点や相違点を資料から読み取り、「高室芝居」が繁栄していた様子を理解する。(知識・技能)
- ・人々を楽しませる役割を果たしている芸能に携わる人たちが差別されていた現実に着目して、役割と差別との間で矛盾していることを考察し、その根拠と合わせて表現する。(思考・判断・表現)

#### 【第2段階】

- ・役者村が広範に芝居を行い、規制を受けていた様子から、属性により生活が営まれ同時に支配を受けていたことを理解する。(知識・技能)
- ・属性が身分差別に転化していったことに着目し、不当な扱いを受け、差別されていた人々の身分について考察し、表現する。(思考・判断・表現)

#### 【第3段階】

- ・「集団を『みなす』ことが私たちにもあるのか」について自分たちの生活の関係から評価し、差別や偏見を克服するための社会との向き合い方を考察し、表現する。(思考・判断・表現)
- ・役者村が扱われていた不当性、差別を見出そうとしたり、不足している情報を収集しようとしたりする。(主体的に学習に取り組む態度)

### (3) 指導計画

#### 【第1時】

段階	時	主な学習活動	予想される反応と獲得される知識	資 料
1	1	<p>◇まちの人々のくらしを思い出す。</p> <p>○まちにはどのような人々がいたのだろうか。</p> <p>○まちはどのような様子であったかまとめてみよう。</p> <p>◇まちが活気づく理由を考える。</p> <p>○まちに活気(元気)があるのは、なぜだろう。</p> <p>○教科書の資料・本文から説明してみよう。</p>	<p>☆前の単元にて取り上げた「熙代勝覧」の再提示。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お店や屋台でものを作ったり売ったりする人。</li> <li>・武士。</li> <li>・お坊さん。</li> <li>・いそがしそう。</li> <li>・にぎやか。</li> <li>・元気がある、活気がある。</li> </ul> <p>(予想)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お金持ちが増えたから。</li> <li>・農業以外の仕事があったから。</li> </ul> <p>(グループで考え・説明する)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・田畑が増えたり、小さな工場ができてたりして産業が発展したから。</li> <li>・人口が増えて、必要な物をたくさん作って売ることができたから。</li> <li>・交通が発達してたくさんの物が運べるようになったから。</li> <li>・人もたくさん行き来するようになって、旅行をする人も増えたから。</li> </ul>	<p>熙代勝覧：日本橋界隈(東書pp.88-89)</p> <p>教科書の資料・本文(日文pp.148-149, 東書p.90, 教出pp.156-157)</p> <p>東書使用の場合：稲作、漁業、特産物生産の様子を示した図版</p>

		<p>◇わかったことをまとめる。</p> <p>○産業や交通が発達することで、人々の生活はどのように変化したのかまとめてみよう。</p>	<p>(個々のまとめ)</p> <p>(意見交流)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・暮らしが豊かになって、もっと生産が盛んになった。</li> <li>・ぜいたくができるようになった。</li> <li>・人口が増えた。</li> </ul>	
--	--	--	---	--

【第2時】

段階	時	主な学習活動	予想される反応と獲得される知識	資 料
1	1	<p>◇(前時の復習と本時の展望)</p> <p>○暮らしが豊かになったり、贅沢ができるようになったりすると、何ができるようになるのだろう。</p> <p>◇芸能のイメージを語り合う。</p> <p>○芸能と聞いて、どのようなことをイメージできるのだろう。</p> <p>○芸能にはどのようなものが伝えられてきたのだろう。</p> <p>◇芸能の移り変わりをまとめる。</p> <p>○いつどのような芸能がおこなわれていたのだろう。</p> <p>◇芸能の目的を考える。</p> <p>○芸能は何のために演じられていたであろう。</p> <p>◇播州歌舞伎(高室芝居)の実際を知る。</p> <p>○芝居を仕事にしていた村はどのような様子であったのだろう。</p> <p>◇芸能に携わる人々への差別を知る。</p> <p>○芝居村は他の村からどのように見られていたのだろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊べるようになる。</li> <li>・おいしいものが食べられる。</li> <li>・かっこいい、きれい。</li> <li>・面白い人たち。</li> <li>・田楽、能、狂言。</li> <li>・琵琶法師(蟬丸)。</li> <li>・室町時代には能や狂言がさかんになった。</li> <li>・江戸時代になると歌舞伎や人形浄瑠璃が始まった。</li> <li>・江戸時代には万歳(まんざい)もあった。</li> <li>・田楽は田植えをしている人たちのためにしている。</li> <li>・神様のためにやっている。</li> <li>・めでたい日や何かの記念に演じられたのではないだろうか。</li> <li>・日本中に出かけて芝居をしていた。</li> <li>・もともとは万歳をやっていた。</li> <li>・370人ぐらいたんが住んでいる村に7つも座(劇団)があった。6割の人が俳優だった。役者の村みたい。</li> <li>・役者村の人でなければ結婚できると言われていた。なぜだろう。</li> <li>・江戸時代の終わりにはぜいたくが禁止される決まりが出され、芝居が禁止された。</li> </ul>	<p>歌舞伎にかかわる錦絵年表を作成して継続的に使用していく教科書の資料(日文pp.152-153, 東書p.p.90-93, 教出pp.154-155)</p> <p>高室芝居について(写真)「御領知名勝旧跡図絵下書拔」,「土御門殿御免許写」,「諸国芝居繁栄数望」を要約した資料</p> <p>柳田國男「毛坊主考」での指摘 俗謡</p>

## 【第3時】

段階	時	主な学習活動	予想される反応と獲得される知識	資 料
1	2	◇芸能に携わる人たちに対する人々の接し方を知り、問題意識をもつ。 ○芸能に携わる人たちは（他でもない）人を楽しませたり人のために仕事をしたりしているのになぜ、遠ざけられたのか。 ○なぜ（他でもなく）そうして人を遠ざけようとしたのか。 （転移・一般化）	・人気者なので、自分の近くにいると比べられるので遠ざけたのではないか。ひがんでいる。 ・特別な技能を持つ人は避けられた。 ・特別な人たちだから、一緒にいると自分たちの生活に特別なことが起きてしまうかもしれないと思って遠ざけたのではないか。 ・蟬丸と同じように特別なことができると目立ってしまい、たたりが起きてしまうと思ったから。	教科書記述 仮名草紙
2		◇芸能に携わる人たちが遠ざけられた背景や影響を知る。 （「継続と変化」の把握、歴史的意義の説明） ○人々はなぜ芸能に携わる人たちを遠ざけたのか。それはいつからか。	・江戸時代の半ばより百姓や町人の生活がしやすくなり、旅に出て芝居を、不安定な暮らしをしている人々への差別や規制が一層強まってくる。 ・他の人より目立つことをしていると平安時代も江戸時代も遠ざけられてしまう。	生野町役場文書を要約した資料 別村関連の資料 東高室村の嘆願書 解放令

## 【第4時】

段階	時	主な学習活動	予想される反応と獲得される知識	資 料
3	3	○差別はどのようなときにどのような人々に対して起きると考えられていたのか。蟬丸がいた頃からの変化はどうであったのだろうか（江戸時代の例から考えてみよう）。  ○仕事に関係する差別について、昔の人たちどう考えていたのか。集団を「みなす」ことが私たちにもあるのか。 ○芸能に携わる人々への差別を例に今の私たちの生活から考えると変な感じがすることはあるか。  ○自分たちの生活ではどう向き合っていくか。何を伝えてくれているのか。	・特別な技能をもっている人々たち。 ・人より目立つことをしていた人々たち、人気者に対して差別が起きる。 ・芸能をしていると差別される。  →「継続と変化」、「歴史的意義」を問う。 ・やはり仕事によって差別するのはいけないのではないか。 ・人がやりたがらない仕事はやっぱり自分もしたくないのではないか。 ・仕事をしている人を差別することは、どんな仕事であってもしいけないのではないか。 ・やっぱり、差別を感じることはある。  ・いじめも昔にあった差別に似ているのではないか。	・前時までに用いた資料を適宜、使用する。

## 6. おわりに

本研究では、これまで人と人を不合理に分け隔てる「社会的差別の状況」を資料から読み解き、集団を「みなす」差別を看破する学習のあり方について考察を加えてきた。

芸能を手がかりに不当に受けた差別の実態を知り、取り上げた事例の時代の文脈をふまえた理解や価値判断を行うことで差別や偏見がいかに根拠に乏しく不当であるか、同じような事象が現代における私たちの社会にも生じているのではないかという自己言及性ができるであろうと期待した。学びの成果として期待するのは、属性

別職業の原則（百姓＝農業、町人＝商工業）とは異なる属性に置かれた人々の差別や偏見の具体、差別された人々が仕事そのものに制約を受けていたことへの認識である。人格や容姿といった個人の特性にかかわっての差別は、一般的に教育内容として取り上げやすく、また取り上げる必要もあろう。このことは『人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕』における、「全ての人は自分の持つ人としての尊厳と価値が尊重されることを要求して当然である<sup>30)</sup>」といった記述から読み取れ、個々人に対する人権の尊重が学ぶべき対象と捉えられやすい。一方で、属性への「差別」は、



所属していること自体が差別の対象となり、人格が等閑視されることへの不当性に気づくこともまた重要であろう。本研究で取り上げた事例で言えば、「高室芝居」の役者の人格が顧みられない施策、行為を資料から読み取ることで、属性にかかわる差別の不当性に気づき、歴史的意義や現代社会を見直すことの手掛かりとなる。歴史的意義、「継続と変化」を視点として、現代社会を見直す手掛かりがえられることは、差別や偏見に関わる学びの意味が見出されることになる。

学びの意味を見出すことを重視するには、次の点に留意して実践していく必要がある。支配を受けていた主体は個人単位なのか属性単位なのか、本研究で取り上げる事例で言えば、「高室芝居」の役者全体にかかわること、さらに抽象度を上げればある属性全体にかかわる差別であることを子どもたちに理解させる必要がある。このことと連動して、差別の不当性に気づけているか、属性の具体としての役者村の繁栄と差別の実態を理解しているか、差別や偏見に向き合う自己と社会に関わる価値観を脱構築しているかどうかを見取るルーブリック、評価問題の作成が必要となろう。この点は今後の課題としたい。

## 註

- (1) 和田幸司・山内敏男「近世身分を取り上げた歴史学習の諸課題-令和2年度版小学校社会科教科書(6年)の検討を通して-」(『姫路大学教育学部紀要』第14号, 姫路大学教育学部紀要編集委員会, 2021年) 25-34頁。
- (2) 神田由築氏によると、「役者村」という呼称は杵築藩の史料から19世紀に芸能者集団の居住する村落を呼ぶ通称として定着したと推察している(神田由築「役者村」〈塚田孝『都市の周縁に生きる』吉川弘文館, 2006年) 123頁)。
- (3) 角田一郎編『農村舞台と播州歌舞伎』(神戸新聞社, 1973年) 8-12頁。
- (4) 本稿では、名生昭雄氏の整理にしたがって、播州一円に広がった役者衆や座元を「播州歌舞伎」「播州役者」という用語を使用し、「役者村」である東高室村の場合を「高室役者」「高室芝居」として使用する。名生昭雄「播州歌舞伎の歴史」(角田一郎編『農村舞台と播州歌舞伎』神戸新聞社, 1973年) 17頁。
- (5) 57-58頁。
- (6) 永井彰子「地役者の活動」(『歌舞伎の歴史Ⅱ』岩波書店, 1997年) 142頁。
- (7) 神田由築氏によると、各地の役者村の由緒の分析から、その起源を八幡宮に勤仕した雑芸能民に求める系統(八幡宮勤仕系統)と、空也上人を始祖とする九品念仏の系譜を伝える系統(九品念仏系統)に分けられるとしている(前掲神田論文, 124頁)。なお、「播磨万歳」の創始については名生昭雄氏の詳細な検討がある。氏によれば、元和3年(1617)時点では「播磨万歳」は存在しているとするが、直接的に東高室を指すかどうかは疑問であるとする(名生昭雄「播州高室芝居の起原について」〈『芸能史研究』33, 芸能史研究会, 1971年)。
- (8) 石瀧豊美「福岡県における『解放令』布達をめぐる」(『部落解放史ふくおか』39, 福岡部落史研究会, 1985年) 68-76頁, 古文書研究会「近世民衆史の泉19」(『部落解放史ふくおか』74,

- 福岡部落史研究会) 135-147頁。
- (9) 柳田國男『定本柳田國男集』第9巻(筑摩書房, 1969年) 387頁。
- (10) 詳細は後述するが、東高室村大歳神社にある享和2年(1802)の手水石の銘に「宗次郎, 三代吉, 新蔵, 嘉兵衛, 勇蔵, 民吉, 太治郎, 巳之吉, 要蔵, おくま, およね」と記されている。『加西市史』第6巻(加西市, 2007年) 204頁。
- (11) 『地志播磨鑑』(播磨史籍刊行会, 1983年) 476頁。
- (12) 551頁。
- (13) 前掲名生論文, 57頁。
- (14) 『加西市史』第6巻(加西市, 2007年) 201頁。
- (15) 『加西市史』第6巻(加西市, 2007年), 名生昭雄「播州高室芝居の発展」(『芸能史研究』35, 芸能史研究会, 1971年)。
- (16) 『加西市史』第6巻(加西市, 2007年) 205頁。
- (17) 「歌舞伎芝居狂言等興行禁令」(『兵庫県同和教育関係史料集』第1巻, 兵庫県同和教育協議会, 1972年) 710頁。
- (18) 『日本庶民文化史料集成』第6巻(三一書房, 1973年) 903頁。
- (19) 第6巻(加西市, 2007年) 209-210頁。
- (20) 和田幸司・山内敏男・岩本剛・長川智彦・川崎和俊「小学校社会科「江戸時代の身分」(6学年)の授業開発Ⅱ-被差別身分へのアプローチを中心として-」(『姫路大学教育学部紀要』第13号, 姫路大学教育学部紀要編集委員会2020年), 35-49頁。
- (21) 註1に同じ。
- (22) 詳しくは星瑞希・小野創太・松村一太郎・渡邊和彦「現代社会における歴史論争問題に取り組むための授業設計-セイシャスらの歴史的思考プロジェクトの着目して-」(社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』32号, 2020年) 91-100頁。
- (23) 註8に同じ。
- (24) 註16史料参照。
- (25) 註20に同じ。
- (26) 『小学社会6年』(日本文教出版, 2021年) 152頁。
- (27) 兵庫県立歴史博物館編『「播州歌舞伎」図録』(兵庫県立歴史博物館, 1983年) に詳しい。
- (28) 註16史料参照。
- (29) 註5史料参照。
- (30) 人権教育の指導方法等に関する調査会議『人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕-指導等の在り方編-』(文部科学省, 2008年) 4頁。

本研究はJSPS科研費 JP 21K02507の助成を受けたものです。